7月11日午後5時25分頃靜岡地方に稀有の强震があり、靜岡及清水の兩市に可成りの被害を與へた。中央氣象臺の發表によると震央は安倍川河口で、北伊豆地震以來最大のものだと云ふことである。

災後同地方の被害狀況を調査せられた內務技師松尾春雄氏の好意により次に清水港の被害概況を掲げる。尙寫眞は何れも同氏の撮影である。

靜岡地方の激震と清水港岸壁の被害

內務省土木試驗所
內務技師 松尾春雄

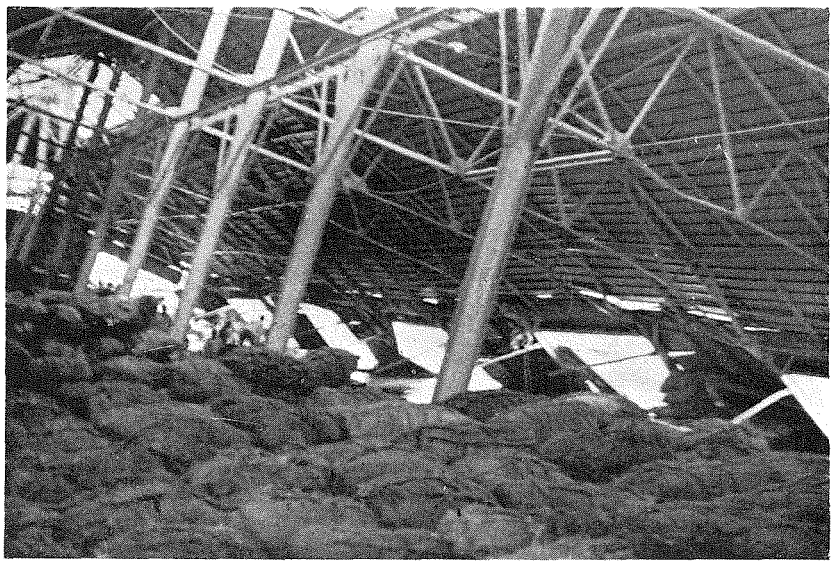
清水港の岸壁は昭和5年11月の地震によつて其1部を破壞せられ、其後1,500粍/秒程度の地震に耐へ得ることを標準として補强工事が施されたのであつたが、7月11日靜岡地方を襲つた地震は此設計の標準より遙かに强烈で、約2,300粍/秒に達し、然も之が岸壁と直角の方向に來たために、內岸壁の1部が破壞せらるゝに至つた。

內岸壁の構造を簡單に說明すると、底部幅7米、長14米、1個の重量2,100瓲の鐵筋混凝土潛函の上部に、1個の潛函に付き各4本宛の30瓩軌條を控鉾として取付け、岸壁線より26米後退して控版を置いたものである。

破壞の原因を考へると、地震を受けた時、岸壁に非常に大きな力が加はつて軌條を切斷し破壞に導いたものと思はれる。云ひ出した岸壁の延長は約250米の間で、殘餘の岸壁延長約800米には、設計以上の强震を受けたにも拘はらず大した異常を認めなかつた。

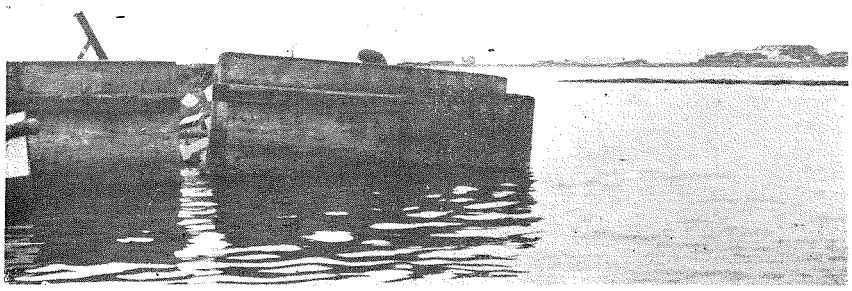
（文責在記者）

寫眞・1　清水港丙岸壁上家の倒壊、水深7.3米、3,000噸級船舶用の岸壁が地震で約5米辷り出した爲上家が倒壊した。



寫眞・2

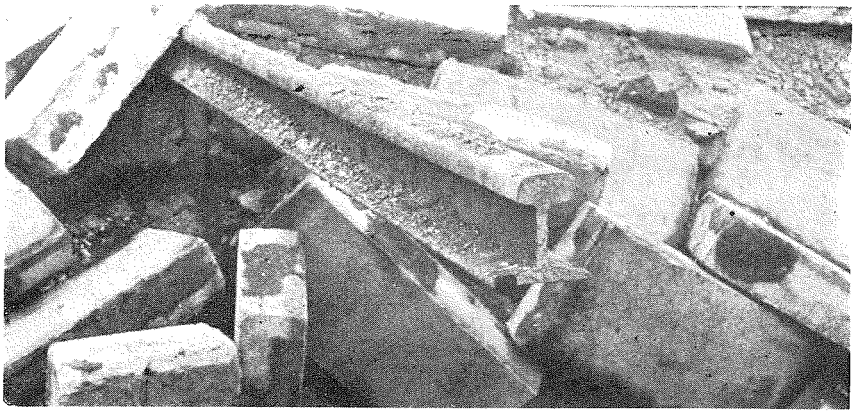
同上上家の内部、被害當時は肥料類が山積してあつた。



寫眞・3
丙岸壁（巴川左岸）右端のケーソン乞出狀況。

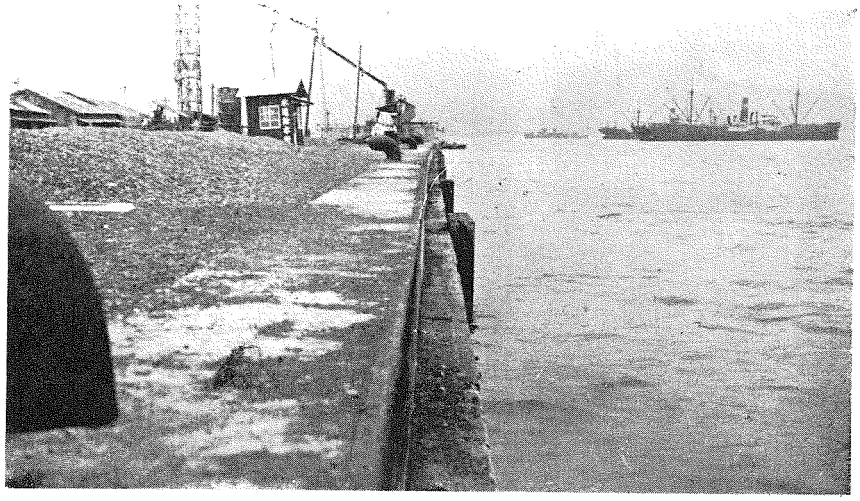
寫眞・4
丙岸壁控鉾軌條の切斷狀況、寫眞の左方が岸壁で右方は倒壞した上家。

寫眞・5
丙岸壁左端被害狀況、岸壁が乞り出した爲中央部の鋪裝が沈下した。



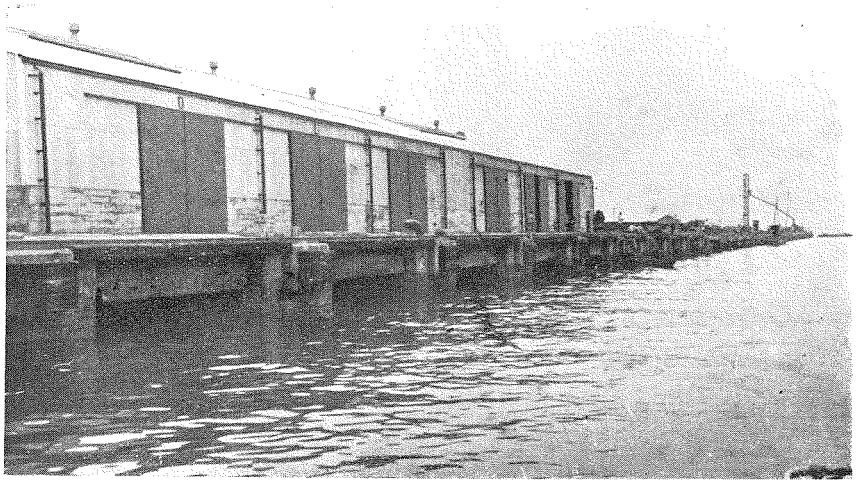
寫眞・6

切斷した30瓩軌條の斷面。



寫眞・7

設計以上の强震を受けたにも拘らず、殆んど被害の跡を認めぬ乙岸壁。



寫眞・8

同上、殆んど異狀なき甲及び追加岸壁。